

---

# 一筋の光

水村陽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

一筋の光

### 【Nコード】

N9306L

### 【作者名】

水村陽

### 【あらすじ】

王都には王の容態が悪く、次の冬を越せず、宰相が次期国王を狙っているという噂がにわか流れ出した頃、騎士のテッドはある日路地裏で倒れている少女と出会う。その子いわく自分は王家の直系で宰相に狙われているとのこと。友人の魔術師キストとともに王家のいざこざに巻き込まれそこから始まる王道中の王道ファンタジー。

## 王都騒乱(1)

### 1-1a 訓練

対戦相手と向かい合っていると言判役の先輩騎士が合図を出し、手合わせが始まった。

戦闘が始まってしまえば、体格こそ似ているが速さに圧倒的に劣る俺では相手の剣をひたすら防ぐしかない。

相手が打ち込んでくる。剣がせまる。打ち込まれた剣をはじき返す。

力比べになれば相手に押し切られてしまう。

そうならないように相手の剣を一撃一撃、細心の注意をはらって弾き返す。

そうして10合ほど打たれると相手が少し離れたところで剣を休めた。

それと同時に相手の雰囲気が変わるのが分かった。先程までとは違う力のもった目。全身から立ち上る「切る」という気迫。こちらの際を伺っている。

一瞬でも隙を作れば切られるという恐怖を覚えながら意識を切らさないように集中する。

次の瞬間、相手の剣が消える。

頭に打ち込まれる寸前でかろうじて止めることができた。このまま競り合いになってはまずいと思った次の瞬間、再び剣が消える。

かろうじて右から斬り上げてくるのが見えた。

しかし、どうすることもできずガラ空きの脇へと吸い込まれた。

騎士の膂力でもって打ち込まれた真剣一刃引きされたものとはいえない。防具の上からでも十分な大きな衝撃で、ひざをつかざる得なかった。

「そこまで」

審判からの終了の声がかかる。

さきほどまで手合わせしていたサキルはつまらなさそうに俺を見ているようだったが、目を向ける余裕はなかった。

「いいかげん、あきらめて新しく宝珠を購入したらどうだ」

先輩騎士がそう声をかけてくる。

なんとか呼吸を整えて、痛みでひきつりそうになる喉から声を出す。

「宝珠を買えるほど余裕もないですし、それにどうしても自分の力以上のものを使うというのが好きになれないんですよ」

「まあ、無理には言わんが。だがお前ならきつと使いこなせると思っただがな」

「ありがとうございます。でもすみません。」

そう言っただ俺は痛む脇腹をかばいながら壁へ寄り、座り込んだ。

先程の戦いでかいた汗が前髪を伝い落ちてくる。そういえば最近髪の毛を切っていないなどどうでも良いことを考える。

そうして息を深く吐いてから鍛錬場を見回すとサキルがまた別の騎士と手合わせをしているのを見つけた。

その鍛えこまれた体が俺と戦った時よりも素早い足さばきで動き、鋭い一撃を打ち込んでいるのを見れば先ほどの俺との戦いでも手加減していたのがわかる。

そんなことをぼんやりと考えているとサキルが相手の防御をかまし一撃を加え、今日の訓練の終了が告げられた。

## 王都騒乱(1)(後書き)

読んで下さりありがとうございます。

王道のファンタジーを目指して頑張りますのでよろしくお願ひします。

よろしければ次話もお読みください。

本当にありがとうございます。

## 王都騒乱(2)

「ただいまもどりました。」

玄関ドアを開けて入ると奥の部屋でゴソゴソという音がする。

「ドーラ、どうしたのですか？」

とフードをとり、からまった長い金髪の髪を振りほどく。そして上着を脱ぎながら奥の部屋に進むと入ってきた私にようやく気づいたドーラが応えた。

「ああ、サリー。良かったです、何か変なことはありませんでしたか」

と立ち上がり慌てた様子で聞いてくるので戸惑いながらも特に何もなかったことを伝える。

それに安心したカーラが息を吐いた。私はドーラの短く切られた髪が少しばかり乱れているのに気がついた。気を取り直したカーラから告げられた一言で私の時が止まった。

「あの者がついに動きます。」

私は背後で暗闇が蠢いたような気がした。いつかこの日がくることはわかっていたが、いざとなると衝撃は隠せない。常にうごめき続ける殺しても殺しきれないほど憎い存在。しかし同時に私が今ここでこうして暮らしている理由でもある。

息を飲み込み、私は問いかける

「では」

「ええ、逃げなければなりません。あの方のためにもあなたは死んではならないのですから」

言われ続けた言葉だ。

その言葉に従い逃げなければ。

「準備はしておきました。ひとまずカロリングにお行きなさい。そこでカロリング伯に会うのです」

「分かりました」

そう言つて、荷物を確認し逃げるための服装に着替え始めた。動きやすいように街の男の子達が履くような麻のズボンを履き、日に焼けていない白い肌を暗闇に隠すように黒い厚手のローブを着込む。護身用に習つた手に馴染みのある短剣を持ち、鞘から抜き出し刃を確かめる。

その時、ドンドンと戸を叩く音がした。ハツと思ひドーラと顔を見合わせる。

私が出ます、とドーラが向かう。

見つからないように玄関からは見えない位置に立つ

「逃げなさい！」

とドーラの叫びが聞こえた。

それを聞くやいなや私は裏口を目指し駆け出した。

闇が迫ってくるの感じながら。

## 王都騒乱(2) (後書き)

読んで下さりありがとうございます。

王道ファンタジー目指しさらなる精進をします。

次話もよろしくお願いします。

### 王都騒乱(3)

いつものご飯どころから家に帰るために市場を抜ける。満腹で少しほろ酔いになり気分が少し高揚している。

ふと、歩きながら鍛錬場での先輩騎士からの言葉を考えた。

宝珠を使わない。

たしかに他の騎士たちに比べて大きく劣るところだ。

宝珠を使えば過去の優れた剣士の力がすぐ手に入る。サキルがいい例だ。あいつの持っている宝珠は200年ほど前の100人斬りをしたといわれる剣豪「百斬士」が死んだ時に生まれた宝珠らしい。まあ、俺も一応宝珠を持っていることは持っている。とは言っても元は親父だ。百斬士とは比べものにならないが子供ながらに親父は強かったと思っっている。その親父が死んだ時にできたのが今も持っているこの宝珠だが、もう親父の力は手に入らない。

細かく言えば俺限定で手に入らない。宝珠の不思議な性質として一度でも装備しながらも、発動させないまま鍛錬やある一定の行動をとってしまうと宝珠はその使い手に対して効果を発揮しなくなるというのがある。

まあ、例えそうじゃなかったとしても親父の教えの通り律し切れるだけの力は使わないが。

とにかくそのせいで俺は宝珠の恩恵を受けることがない。

いや、受けることができない。

そのことは5年前に騎士となった時から思い知らされているのでもう割り切ってはいる。

だがあまりにも他の騎士たちよりも劣るならば足を引っ張りかねない。

しかしどうしても自分の力以外の力には頼りたくないという思いも忘れることができない。

そんなことを悩みながら歩いていると市場の店から声がかかった。「よう、テッド！浮かない顔してるな。またサキルにでも打ちのめされたのか？」

嫌なことを大きな声で言うオヤジである。大きくするのは店ぐらいにしやがれ。しかも当たっているからお腹立たしい。

などと仏頂面を深くしながらにも答えないでいると

「お？ 当たりか。こりやすまん。ま、これでも食べて機嫌直せや」といって売り物のワゴリの実を投げてきた。

「おいおい、いいのかよ。売りもんだろ？」

「なあに、一つや二つぐらいやつたつてかまうもんか、。売るほどあるし、それにお前さんにならやつたつてバチは当たんねえーさ。むしろやらなきゃバチが当たる」

「まったく、あの時助けたのはたまたまなんだから別にいいのに」

「いや、忘れねえさ」

まったく義理堅い親父である。だが昔いた隊商のオヤジもこんなだったな、と俺は妙に嬉しくなりありがたく頂戴することにした。

「そーかい、じゃ、貰つとくよ」

「おう、氣いつけて帰れよ」

「あんがとよ」

結局考えていたことをすっかり忘れ、ワゴリの実を食べながら再び満月の光の下歩きだした。店主と別れてしばらくしてから家への近道になる路地裏の入り口にさしかかった。

王都とはいえ、いや王都だからこそ光の届かぬところは多く、またその闇は深い。

そのことを仕事柄よく知っている俺は気を引き締め直し剣の柄をいつでも握れるようにしてから入る。

月明かりが照らす中、両側に続くまっすぐな土壁の先の三叉路がありそこには木箱が積み重なっている。

物陰からの襲撃を警戒しながら通り過ぎる。

気配がしたので、目を向けてみると黒い物体がゆっくりと上下し

ているのが見えた。  
なんだろうと思いい目を凝らす。  
人だ。

しかも今まで気付かなかったが血のにおいがする。  
慌てて近寄るとはつきりと見えてくる。

その子―どうやら女の子のようだ―は黒のローブを着てうつぶせで倒れており、傷を負っているようだ。

焦って声を掛けるとわずかに反応がある。

医者に連れて行こうと彼女を抱きかかえるとかぶっていたフードが外れ、ひとまとめにされた長い金髪がこぼれ落ち、わずかに意識が戻ったようだ。

「おい！ 大丈夫か？ すぐに医者に連れて行ってやるからな」  
すると少女は薄く目を開いて

「だ、駄目。人目につくのは」

「な、バカなことを言うな！ この傷は医者に見せないと」

「お、お願い」

そう言う少女腕を強くつかんだが力尽きたのか全身から力が抜けてぐったりとした。

どうするか迷う。少女の言葉を心苦しいが無視するのもありだがどうも様子がおかしい。あまりにも切羽詰っている。

見たところ少女の傷は深いが、家に戻ればなんとか自分の魔術により手当できないこともなさそうだ。手に負えなくなれば躊躇なく医者に見せることにすると少女を抱き上げ、暗い夜道を走り出す。

### 王都騒乱(3) (後書き)

アクセス解析を見ると読んでいただいている方がいました。  
感謝感激です。続きもがんばりますのでよろしくお願いします。

## 王都騒乱(4)

家につきベッドに少女をうつ伏せで寝かせる。

治療のため治療のため、とつぶやきながらローブを脱がし、血で染まった服を切りとる。

あらわれた背中では左肩から真下に腰の少し上辺りまで大きく切り裂かれていた。

記憶の片隅から<治癒の律>を引つ張り出しながら指先に魔素を集め<陣>を描き、<呪>を合わせて唱える。<陣>を構成する魔素から溢れる光量が少しずつ増す。

<陣>を構築し終わり、最後に鍵となる<呪>を唱えると陣から溢れる光が爆発的に増し、そのまぶしさに目を伏せる。やがて光が消えると血で汚れているが傷の無くなった真つ白の肌が見えた。久しぶりに使った魔術だったのでいまいち自信が無かったがどうやらうまく働いたことに安堵して息をつく。

布と水桶を用意し水で濡らした布で血をぬぐうと背中の中の首の下あたりに丸い焼印が見えた。それを見た瞬間、脳裏にある話がよぎった。

まさかと思いつつ血をぬぐいきり傷薬を塗り込み、包帯をまいて布団をかぶせた。片付けを手早く終わらせるとようやく人心地つけたので寝ている少女を観察する。

年の頃は14、5歳ぐらいだろうか。血で多少は汚れているが豊かな長い金髪に長いまつ毛。唇はぷっくりと赤くこれぞ美少女、と言っても良いぐらい顔は整っている。

抱えたときの感触からして手足はすらつと長いが体型の方はまだまだ将来に期待だろうとなんともなしに考える。

一息つくるとたんに眠気が襲ってきた。昼間の訓練に加えて酒も入っていたしその上久しぶりの魔術の行使で眠気を自覚するとドンドン眠気が大きくなる。

寝台はワケあり少女で埋まっていたので仕方なく長椅子で寝ることにして部屋をあとにした。

翌朝、窓から入ってきた光が眩しくなり目が覚めて明るさから逃れるために寝返りを打ったが大して幅も広くもない長椅子の上だということ忘れてそんな動きをすればどうなるかというところ。

当然そのまま床に落ちた。

しかもちようど鼻をぶつけてしまった。なんとも強烈な目覚ましをくらった俺はうめきながらぶつけた鼻の頭を撫でつつ立ち上がる。起きたての頭がようやく働きだして昨日の出来事を思い出した。

慌てて昨日の少女の様子を見に行くと昨日寝かせた格好のままだった。

少女の顔を覗き込むと昨日よりはだいぶ顔色が良くなっている。それでもかなり血を流していたようだったのでしばらく目は覚まさないだろうなと思い、さてこれからどうするかと考えた。

ちようど今日は非番の日だ。足りないものも足しておいた方が良さそうなものもあるから市場へ買いに行こうと思ひ、俺がいない間に万が一少女が起きた時のことを考えて書き置きを残して出かけることを決めて準備を始めた。

必要なものを買ひ、忘れたものが無いのを確認してから市場から帰って来てもまだ少女は寝ていた。買ってきたものを片付けてしま

えば特にすることもないので少女の隣で剣や鎧の手入れをすることにした。

ちようど鎧を片付け終わった時に少女が目覚ました。

「目は覚めた？ 気分はどう？」

まだ少し意識がはつきりしないらしく目を瞬かせている。そして部屋を見渡すと

「あの……、ここは？」

と不安げな様子で聞いてくるので、

「俺の家だよ。大丈夫、他の人には知られてないし、肩の傷の手当もなんとかできたから」

と答えると少女の強ばっていた顔が緩んだ。

「良かった……」

そう言う少し慌てて

「あ、あの、あなたは……？」

「俺はテッド、一応、それでも王国騎士団に所属しているから安心して。君に危害を加えるつもりなんてないから」

少女を安心させるように笑顔を浮かべながら答える。

「えっと、助けて下さいましてありがとうございます、テッド様」

「な、テッド様だなんていいよ」

呼ばれたことの無い呼ばれ方をしたので少し慌ててしまった。

「それより、君の名前は？」

「サリー、と言います」

「そう、じゃあサリー。起き上がれそう？ 肩の傷は一応く治癒の律でふさいでおいたけど」

そう聞くとサリーが起き上がるうとしたので傷のあった場所に触れないように背中に左手を回して支え、右手で彼女の手を持って引っ張るとゆっくりとではあるが、起き上がった。

「うん、大丈夫そうだね。痛みが残っているかもしれないけど、しばらくしたら消えると思うからから」

「本当にありがとうございます」

「いや、別にかまわないさ。じゃ、俺は何か食べられるものを持ってくるよ。少し待ってて」

と部屋を出て用意しておいたスープを持ってくるため部屋を出る。

食事が終わり、彼女の隣に椅子を置いて座り、聞きたかったことを聞く。

「さて、一つ聞きたいんだけど。君はどうしてあそこで倒れていたんだい？ それもあんな傷を負って」

そう聞くと顔を曇らせ、うつむいてしまった。

「もしかして背中の印が関係すること？」

それを聞いた瞬間伏せていた顔を勢い良く上げ、驚いた顔を向けてきた。

「悪いけど、治療するときに見てしまったよ。しかし、その反応を見るとどうやら君は王族だね、しかも直系の」

そう、背中の焼印は王家のしかも直系を表す印なのだ。ここサリル王国では王族は5歳になると背中に王家の証明として焼印を入れる。紋様は両親　つまり今代であれば君主である女王とその夫の文様を半分ずつ受け継がれるが、その紋様は秘中の秘でありごく限られた人物しか見ることは許されないのだ。

「あの……、この事は！」

「大丈夫、言い触らしたりはしないし、暗くてしつかりとは見れなくてどんな紋様だったかは憶えてないから。けどこれは言葉遣いを直した方が良くないかな？」

思いつめた様子の少女を落ち着かせるよう冗談めかして言う。

「い、いえ、そんな普通に話して下さって結構です」

そう言って少し荒くなつた彼女の息が落ち着くのを待って切り出

す。

「だけど、それならなおさら分らないな、君があそこで倒れていたのが。護衛の人はいないのか？　そもそもなぜ襲われてあんな所で倒れていたんだ？」

しかしその言葉に彼女は顔を伏せる。

「事情があるみたいだね。この分なら騎士団に知らせるのもやめておいた方が良さそうだね。ま、昨日使ったく治癒の律は体の魔素を消費してしまうから2、3日は安静にしておいた方が良いでしょう」

「いえ、ご迷惑になってしまいますのですぐに出ていきます。本当にお世話になりました。いつか必ずこの恩は……」

そう言いながら寝台から降りようとしますが、上手く立てずに倒れこみそうになるのを支えて、

「無理だよ。昨日の今日で動けるわけがない。おとなしく寝てないと」

サリーがベッドに戻るのを支える。きちんと寝台に入れ、布団をかけ直す。

「とりあえず、大人しく寝ておきなよ。大丈夫、誰にも言わない。荒事になっても騎士だからそっちは慣れてるし、あんまり強くはないんだけどね」

そういうと彼女は不安げな顔になった。

「それとも俺が怖い？　もしかしたら襲ってくるんじゃないかと」

「い、いえ、それは無いです」

「なら、もうこの話は終わり。大人しく寝てなさい」

そう言うて話はもう終わり、とばかりに手をたたいて立ち上がり椅子を持って歩き出す。部屋を出るところで振り返って笑いながら少女に向かって言う。

「あ、そうそう。もし何も言わないでここからいなくなったら騎士団に言っ君を探してもらってから、勝手にいなくならないように」  
そうして返事を待たずに前を向き出て行く。

王都騒乱(4)(後書き)

読んで下さりありがとうございました。

次話もなるべく早く投稿できるよう頑張ります。

## 王都騒乱(5)

食事が終わり、彼女の隣に椅子を置いて座り、聞きたかったことを聞く。

「さて、一つ聞きたいんだけど。君はどうしてあそこで倒れていたんだい？ それもあんな傷を負って」

そう聞くと顔を曇らせ、うつむいてしまった。

「もしかして背中の印が関係することかい？」

それを聞いた瞬間伏せていた顔を勢い良く上げ、驚いた顔を向けてきた。

「悪いけど、治療するときに見えてしまったね。しかし、その反応を見るとどうやら君は王族だね、しかも直系の」

そう、背中の焼印は王家のしかも直系を表す印なのだ。ここサリル王国では王族は5歳になると背中に王家の証明として焼印を入れる。紋様は両親　つまり今代であれば君主である女王とその夫の文様を半分ずつ受け継がれるが、その紋様は秘中の秘でありごく限られた人物しか見ることは許されないのだ。

「あの……、この事は！」

「大丈夫、言い触らしたりしないし、暗くてしっかりとは見れなくてどんな紋様だったかは憶えてないよ」

思いつめた様子の少女を落ち着かせるように言う。荒くなった彼女の息が落ち着くのを待つて切り出す。

「だけど、それならなおさら分からないな、君があそこで倒れていたのが。護衛の人はどうしたんだ？ そもそもなぜ襲われてあんな所で倒れていたんだ？」

しかしその言葉に彼女は顔を伏せる。

「事情があるみたいだね。この分なら騎士団に知らせるのもやめて

おいた方が良さそうだね。ま、昨日使ったく治癒の律は体の魔素を消費してしまうから2、3日は安静にしておいた方が良いでしょう」

「いえ、ご迷惑になりますのですね。本当にお世話になりました。いつか必ずこの恩は……」

そう言いながら寝台から降りようとするが、上手く立てず倒れこみそうになるのを支えて、

「無理だよ。昨日の今日で動けるわけがない。おとなしく寝てないと」

サリーがベッドに戻るのを支える。きちんと寝台に入れ、布団をかけ直す。

「とりあえず、大人しく寝ておきなよ。大丈夫、誰にも言わない。荒事になっても騎士だからそっちは慣れてるし、あんまり強くはないんだけどね」

そういうと彼女は不安げな顔になった。

「それとも俺が怖い？ もしかしたら襲ってくるんじゃないかと」

「い、いえ、それは無いです」

「なら、もうこの話は終わり。大人しく寝てなさい」

そう言っただけはもう終わり、と手をたたいて立ち上がり椅子を持って歩き出す。部屋を出るところで振り返って笑いながら少女に向かって言う。

「あ、そうそう。もし何も言わないでここからいなくなったら騎士団に言っただけを探してもらっちゃうから、勝手にいなくならないようにね」

そうして返事を待たずに前を向き出て行く。

次の日の朝まで特になにも起きなかった。サリーは食事以外はく

治癒の律で消費した体内の魔素を回復するためなのかずっと寝ていてあれからほとんど会話も無かった。

今日は騎士団の方に行かないとならないので昼食を用意してから出かける。

集合して訓練を始める前に隊長から全体連絡があるようだ。

「昨日言った王宮に関わる重大事件の重要参考人に関する情報はまだ何も入ってこない。王都から逃れた形跡もないことからおそらくまだどこかに潜伏していると思われる。昼からの巡回組は十分に注意してくれ。まだ手配書を見ていないやつは貼り出されているから必ず見ておけ。以上だ、訓練を始める、準備しろ」

昨日、ということとは非番だったときのことか。俺のいない間にそんなことが起きていたとは。それにしても王宮に関する重大事件……。

なにか関わりがあるのかと思い、そばにいた同期の騎士に話を聞くことにする。

「なあ、王宮に関する事件ってなにがあったんだ？」

「ん？なんだ知らないのか？」

「ああ、昨日は非番だったからな、で、なにがあったんだ？」

「まあ、手配書に書いてあることしか知らんが、どうも王宮で事件があったらしくてな、しかも宰相がらみの。それで手配が廻っているんだ」

「王宮で事件？ どんな事件なんだ？」

「宰相が暗殺されそうになったらしい それ以上詳しくはわからないが」

「暗殺？ それで犯人はどんなやつなんだ？」

「手配書に似顔絵も書いてあるが金髪の美少女だったぞ？黒い口―ブを着て、それに護衛が肩に傷を負わせたらしい」

「へー、そんなことが」

「まあ、噂によると王位を狙う宰相を今のうちに殺してしまおうっ

て王妃派が送り込んだ刺客らしいぜ」

やはり、もう一度彼女に話を聞く必要があるそうだ。

「ま、単なる噂だけどなんにせよ。捕まえてみればわかる話だ」

そういつて話は終わり、訓練が始まった。その日の訓練は今ひとつ集中を欠いたせいでいつものように剣を防ぐことができず、打たれまくるといふ散々な結果だった。

聞かないといけないことが気になってしまいなるべく早く家に帰り着く。

家に帰り、早る気持ちのままに入り口の戸を開けて家に入る。そのままの勢いでサリーの寝ているはずの寝台に向かう。

目に入ってきたのは上半身裸で汗を拭っているサリーの姿だった。

お互いに目が合ったまま動くに動けないまま数瞬。サリーが悲鳴を上げようとするのを感じた俺は慌てて詰め寄り、口をふさぐ。

「悪かった、謝るから落ち着いてくれ。悲鳴を上げないで、頼むから。とにかく落ち着いて、ちゃんと向こう向くから」

まくし立てるように言っつてサリーがコクコクと頷くのを見てからそつと口から手を放し、急いで後ろを向いて言う。

「急ぎで聞きたいことがある。なるべく早く着てくれるとありがたい」

そついつと後ろでゴソゴソという音がして

「き、着替え終わりました」

という声が聞こえたので恐る恐る振り返るときちんと着替えたサリーがいた。

「あー、その悪かった、いきなり入って」

「い、いえ、気にしてませんから……。……。それであの、聞きたいこととはなんですか？」

「気を取り直して聞くことにする。」

「あんたを襲ったやつに関してなんだが」

「そういうと体を強ばらせ、うつむいてしまっ。」

「昨日のうちにある手配書が回ったみたいだ。背格好は黒ローブに金髪で、肩に傷を負ってる。そいつは宰相を襲って護衛に撃退されたんだが……」

「！ 私そんなことしてません」

「だが事実、手配書は正式なものとして出回っている。宰相が王位を狙っているという噂が本当なら君が邪魔になって殺そうとするのもありえない話ではないと思う。どうだろう、本当のことを話してくれないか？」

「彼女はうつむいたまま拳をにぎる。」

「なんですか？」

「え？」

「なんでそんなに助けくれようとするんですか？ だって相手は宰相ですよ？ 文官のトップで王位を狙ってるようなやつですよ！ ？ なんでそんなに助けようとするんですか？」

「それは……」

もつともな質問に答えようとするが、同時に不穏な雰囲気を感じ取る。いつもならその喧騒が聞こえるはずなのに全く聞こえない。そう訝しんでいると答ええない俺を変に思ったのか彼女が見上げてくる。

「あの……」

「静かに、黙って。 変だまわりの音が聞こえない」

「え、それは、あの？」

「周りが静かすぎる。 いつもならもつと周りに音がする。 まだ早いし寝ているはずがない」

そういつとある可能性に気づく。

「君を狙っているやつらか」

その言葉にサリーは

「!?!? 何故? まさか」

「いや、俺じゃない。誰にも言っていないし、バレるようなこともしてない……と思う」

「なら何故!?!」

「さて、分かん。もしかしたら君を運ぶときの姿を誰かに見られていたのかもしれない。それより逃げる準備を」

そう言つて最低限の装備と荷物を準備する。さらに<陣>を構築しする。

「あ、あの?」

「急いで。とにかくここを出る。行く先は……ああ、あいつのところで良いか。知り合いの家に行く」

「まだ質問に答えてもらつてません!」

そう彼女が叫ぶので、準備していた手を止め振り返つて答える。

「なんとなく放つておけない」

それを聞くと彼女は茫然となり聞いてきた。

「そ、それだけ……ですか?」

「そう、それだけ。それより急いで」

そう言つて止めていた手を動かして<陣>の構築を再開する。

その時、入り口の戸から「ドンドン」という音がする。サリーと顔を見合わせる。

答えないと再び戸が叩かれた。

「はい、少々お待ちくださいーい」

と大きめの声で答えてからサリーに向かつて小声で

「合図したら目を覆うんだ。その後は誘導するからついてきて、いいね」

「は、はい。その、……ありがとうございます」

「その言葉は逃げきつてから」

そうして「はいはいお待たせしました」と言いながら戸を開けるとそこには黒いローブを着た男達が立っていた。どことなく雰囲気暗く、それでいてそれ以外の印象を人に与えない「薄い」男達だった。

「あの、どちら様で？」

「人を探していまして、こちらにいと伺ったもので」

「はあ？ 一体誰のことで？」

「隠し立てするおつもりですか？ 身のためにならないですよ」

「と言われましてもね」

「中をあらためさせてもらいましょう」

そう言つて強引に入ってくる。

「サリー！」

そう言つて発動の〈呪〉を唱える。その瞬間、閃光が放たれる。

「ぐ、ぐう」そう言い男たちは目を覆い、呻く。中には倒れ込んでいるものもいる。

「行くぞ、サリー」

サリーの手を左手で引きながら裏口を出る。

出たところで右手から剣刃が迫る。慌てて腰の剣を抜き防ぐ。

「サリー、まっすぐだ。行け！」

そう言つて相手の剣をはじめ飛ばし斬りかかってきた者と対峙する。

「邪魔するつもりなら容赦は……」

その言葉を聞かずに左手を相手に向け、〈呪〉を唱える。

左手にとどめていた〈電撃の陣〉から電気による圧力が発生し、男を吹き飛ばす。

それを確認した俺はサリーを追うために走り出した。

王都騒乱(5) (後書き)

読んで下さりありがとうございました。

王道ファンタジー目指しさらなる精進をします。

次話もよろしくお願いします。

## 王都騒乱(6)

なんとか黒ローブの男たちをまいたその足で知り合いの家に向かう。

人目をしのびながら扉を叩く。しばらく叩き続けていると中から不機嫌だとすぐに分かる声がある。

「だれだ」

その声と同時にドアが開く。目の前には怪訝な顔をした魔術師の証である黒いローブを着た人物が立っていた。

「よ、キスト」

「む、テッドか。どうした？」

「ちょっーと込み入った訳があるんだ。とりあえず入れてくれな  
いか？」

「……また、なのか？ ……まあいい」

「悪いな。連れもいる」

戸をくぐりながら後ろを指差す。

「あ、あのテッドさん、良いんですか？」

「うん？ 何が？」

「その、お邪魔しても……」

「ああ、気にすんな。良いから早く入れよ」

「おい、きちんと説明はしろ」

「ま、話はずでさせてくれ」

そう言っ中に入る。

「まあいい。とりあえず入れ」

「お邪魔します……」

向かい合わせで椅子に腰をかける。

「それで？ こんな時間にボクを訪ねてくるんだ。一体どんな事情  
なんだ？」

「それなんだがな、先に謝っておこう。すまん」

「やっぱりまたか……」

「あー、まあ、そうだ」

「まさかまたどこぞの盗賊団にさらわれた家族を助けに行くとかか？」

「いや、違う」

「なら再び悪徳金貸しへの借金返済に困った娘に泣きつかれたとかか！？」

「そんなんあったか？」

「助けた女にデレデレしてただろ！」

「えー、あ、うん、あったあった。いやいや、違う。また別だ」

「なら」

「まあ、とにかく落ち着いて話を聞けよ」

ようやくキストが黙って話を聞く態勢になる。

「まずはこの娘の紹介からだ。この娘はサリーとって……」

「まさかお前の、こ、恋人じゃないだろうな!？」

「なんでそうなる!？」

「い、いや、違うなら良いんだ」

まったく落ち着いて説明させるよな、とぼやきながら「ホンと咳払いをして気を取り直してから話を再開させる。

「実はな、こいつは……」

「ま、待ってください、テッドさん」

「ん？」

隣りに座るサリーからなぜか制止の声がかかる。

「まさか、全部話すつもりですか、この方に！」

「まあ、俺が一番信頼する相棒みたいなやつだし」

「魔術師といっても女性ですよ!？」

そう、キストは魔術師に多い女だ。ただし実戦経験が不足がちで理論重視の魔術師とは違い、腕はずば抜けて良い。いわゆる『天才』というやつだ。今まで色々と厄介な事件に協力 巻き込んだともいう をしてくれてその実力はよく知っていて、かつ、下手する

と騎士団にも宰相派の手が回っているかもしれない現状では一番信頼できるやつなのだ。

「だが腕は良いぞ。それになにより信頼できる。騎士団には頼れない以上こいつの助力が無いとこれからは厳しい」

「ですが……」

「ふん、なにやら色々ありそうだな。テッド、良いから話せ。ボクは協力してやるから」

「な？ キストもこう言ってるし」

「……はい」

そうしてキストにこれまでの経緯を話した。

「また厄介な……」

「まあ、そういうな」

「いいや、毎度毎度キミはどうしてそう厄介ごとにはかり首をつっこむんだ！ しかも相手は女性ばかり」

キストが立ち上がってこちらを指さしながらまくしたてる。

「たまたま関わったやつが厄介ごとなだけだ」

「たまたま？ ふうん、そうかキミはたまたままで盗賊団と戦い、悪徳金貸しの用心棒と大立ち回りをしたりするのか」

「う……、いや、それはだな……そう！ 運が悪かったただけ。きつともう少し上手くやったら穏便にいったんだって」

「確かに運は悪いだろうね。普通はそんなことばかりに巻き込まれたりはしないからな。それもこれもキミが変なことにはかり関わるからだ」

「な！ じゃあ放っておけって言うのか？」

「いや、別にそこまで言っていないだろ」

「大体俺だけが悪いみたいな言い方してるけどお前だって俺のこと色々厄介ごとに巻き込むじゃねーか！」

「な、なにを……」

「お前だって表に出てこない魔術書を追ったりするのに裏のマーケットに潜入したり、精霊の支配する霊山に登ったりしたじゃねーか

！」

「いつもいつも巻き込まれてばかりだからたまには構わないだろ！」  
「そんなのが言い訳になるか！ それに困ってるやつを放っておけないだろ」

「ふん、それより彼女だ。何かアテはあるのか？」

「いや、実はまだあまり話を聞いてなくてな。それについさっきおそらく宰相の手の者だと思われるやつらに襲われたんだ」

「そういうことは先に言え！ ……それで、アテはあるのか、えーと、王女……様？」

「サリーと呼び捨てで結構です。アテは……ひとつだけあります」  
「どこだ？」

「カロリングです」

「カロリング……たしか王都から東に馬で5、6日ぐらいの伯爵領だったか……？」

「そうなんですか？」

「知らないのか？」

「は、はい。あのドーラが逃げる前にそう言っていて……」

「ドーラとは？」

「あ、ドーラ＝フォワといって私の付き人のようなものをしてくださいました。最初に襲われた時に身を呈して足止めをしてくれたおかげで逃げる事ができたんです」

「そうか」

「あ、でもきつと大丈夫です。護身の心得があると行ってましたし」

「ああ、きつと無事だ」

「ならひとまずカロリングに行くということが良い？」

「あの、キストさん……本当に良いんですか？ きつとご迷惑をかけてしまいます」

「別に構わない。巻き込まれるのも物騒な目に合うのもテッドのせいで慣れてる」

「でも……」

「良いから、気にしなくていい」

「……はい」

それにテッドと二人きりで旅なんかさせられないからな、と小声でいうがサリーにははつきりとは聞こえなかったようだ。

「あの、なにか？」

「い！？ いや、なにも！」

「そうですか……。あのお二人とも本当にありがとうございます！」

そう言っって勢い良く頭を下げるサリーに俺たちは

「その言葉はこの事態が解決してからだ」

「ああ」

と声をかけこれからの予定を決めていった。ひと通り決め終わると結構ないい時間になっていた。

「とりあえず今日はもう寝よう。追手はどうか撒けたみたいだから敵もすぐに襲撃はしてこれないだろうし、俺も警戒はしておくから」

「ら」

「出発は明日の夜がいい。人目につかないように出れる」

「そうだな」

そう言っって今日は寝ることにする。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9306/>

---

一筋の光

2010年10月8日14時40分発行